

仕事観を話し合う場

四木 信／OWL仕事図書室

私は20歳前後の頃に、「自分はこれからどんな生き方・働き方をするのか」を考え、迷う中で、「そもそも人間にとって仕事とは何だろうか。今の社会で、仕事をどういうふうに考えて生きていくべきなんだろうか。自分の具体的な職業について考える前に、自分と社会と仕事のあり方について考えなければいけないのではないか。」と思い、悩み、苦しかったことがあります。それまで、中学生時代は学校が終わって家に帰るのがいつも夜11時頃といった不良のような生活をし、高校生時代は自称遊び人間としてサッカー、バンド、恋、その他いろいろ青春を謳歌していましたので、今の自分の頭の中が空っぽであるのは自業自得と覚悟し、遅ればせながらそろそろ真面目に自分の生き方・働き方を考えなければいけないと思い、自分で言うのも恥ずかしいのですが生まれて初めて真剣に考え、仕事と向かい始めたのです。

とりあえず、いろいろな人の仕事観を学びたい、そして自分の納得できる仕事観を考えたいと思い、経験豊富な年輩のさまざまな方に、「あなたにとって仕事とは何なんでしょう。か、仕事をどのように考えて生きておられるのでしょうか」と聞いて回りました。でも、私が納得できる考え方はなかなか聞くことができませんでした。

自分の仕事についてしっかりと考えないで、どうして生きていけるのか。仕事とは人生そのもの、その人そのものじゃないか。その仕事について考えないのでは、生きている意味がないではないか。人は、仕事についてどうしてしっかりと考えようとししないのか。不思議でなりませんでした。

また、この社会には、仕事観について話し合い、考える場が、どうしてないのか。この社会はどこかおかしいのではないかと、とも思いました。

さらに、仕事観を考えることが中心に位置づけられていない、いや仕事観を考慮に入れないで、どうして教育が可能なのか。自分が今まで受けてきた教育とはいったい何だったのか。自省とともに、教育への疑問をもつようにもなりました。

お互いの「仕事観」を学び合い、年輩者も、若い人も、謙虚に自分を見つめ、充実した仕事観を築いて、価値ある仕事を、自らが責任を持てる仕事をしていきたい。そのような話し合いをできる場をつくりたい、つくらなければならない。そんな思いを今も持ち続けています。

幸いにも杉村芳美さんに研究会の世話人をお願いすることができ、1993年4月に第1回OWL仕事研究会をスタートさせることができました。そして以前から相談に乗っていた平田哲さんや、毎回『OWL』に原稿を書いていた片山忠則さんのアドバイスや応援を受けながら、1997年1月からは中嶋哲夫さんにも世話人を引き受けていただき、参加者の皆さんの中からも、連載原稿やレポート原稿を書いていた梶川哲司さん、佐藤道彦さん、奥野明子さんほか、大いなる協力者が登場し、約5年間ほぼ月に1回のペースで研究会を続けることができています。

よつぎ・しん

1950年大阪市生まれ。京都工芸繊維大学卒業。
団体職員として勤務の傍ら、仕事をテーマに活動。

最近、ストレス社会という言葉をよく聞くようになってきましたが、実際にウツや対人恐怖など神経症を自覚する人が増えてきたように感じます。対人関係が苦手で意識が内に閉じこもりがちな人、組織のなかで上司と部下の板挟みの立場にいる中年サラリーマンにありがちと一般的には思えるのですが、そういう人だけではないようです。性格的に非常に好感を持てる人、大学生や20歳代の若い人などにも、最近をよく見られるようです。

実は私もそういう傾向があります。19～23歳の約5年間ウツ気分の真っ暗な生活を送っていました。対人拒否で部屋に閉じこもりがちでした。対人恐怖でなかなか人と会えませんでした。人と会ってもたいがい、自分の考えが混沌としてまとまらないので私から話すことはできず、人の話を聞いているだけでした。たまに自分の考えていることを話すと、暗い変わったヤツだ、と思われていました。本音で話をできる友人がいませんでした。

でも、その真っ暗な5年間の生活のなかで、悩み、迷い、考えていたこと、そして心の中で決めた生き方は、25年という四半世紀たった今の自分の原点となっています。「これから何でもできる自分と、今は何もできない自分」「楽しみや喜びと向き合うのもいいが、苦しみや悲しみと向き合う方がより人間らしいのでは」「存在価値のある生き方をしよう」「若い人から後ろ指をさされないような生き方をしよう」「ものごとは根っこを見ないと意味がない」「仕事観—私の疑問から私の課題へ」などです。そのあたりのことから書き始めていこうと思います。

今までに何度か『OWL』誌上で「私の仕事観」の原稿を募集してきましたが、なかなか書いていただけません。みなさん、他人の仕事観を知ることが自分の考え方を深める参考になることがあるので興味があると思うのですが、自分の仕事観となると、そんなもの他人が読んで何の役に立つのかと思いがちなのでしょうか。確かに私自身もそんなふうと考えてしまいがちです。

そこで、まず私自身から書いていこうと思います。といっても、原稿を書くことに慣れていませんので、自分自身と対話しながら、同じようなことを行ったり来たりしながら書いていくことになるとは思いますが、どうかお許しください。こんな幼稚な内容の文章を載せているのかと笑いながら読んでいただければ、そしてこの文章を契機に、いろいろな方が「私の仕事観」を書いていただければ幸いです。

◆『OWL』原稿を募集しています。◆

テーマ：私の仕事観 タイトル：自由 文字数：約1,000～3,000字(1～2頁)

送り先：OWL仕事図書室／大阪府羽曳野市羽曳が丘西3-6-1 〒583-0865